

中島孝幸先生のご退職によせて

日本語日本文学科教授 都 染 直 也

中島孝幸先生と初めてことばを交わしたのは、静岡県浜名湖畔にあった、会社の研修所の食堂だった。1989年初夏のことであったと記憶している。この年、科学研究費重点領域研究「日本語音声」が始まり、日本語研究者がさまざまな形で協力することになった。三重大学に在職中であった中島先生は、北海道大学関係者を中心とする班の一人として参加された。

食堂の4人掛けの小さな食卓で、偶然、向かい合わせの席になり初めての挨拶をしたのであった。当時私は東京の前任校に在職中で、同窓とはいえ、それまではまったく接触のないすれ違いであった。

まだ経歴は浅かったものの方言研究という専門分野の特徴から、初対面の人との数少ないことばのやりとりで、そのお人柄を無意識のうちに直感していたが、中島先生との初対面においても、それはすぐに感じ取ることができた。わざわざ私のことを言わずとも、中島先生のお人柄は、誰しもが直感できることとは思っているのである。その翌年、1990年4月に、中島先生より一足先に、私は甲南大学に勤務することになった。

初めてお目にかかってから7年を経て、阪神・淡路大震災の直後に御病気でお亡くなりになった寺島樵一先生（連歌を中心とする中世文学が御専門）の後任として、1996年4月、日本語教育・日本語学（特に日本語文法）を御専門とする中島孝幸先生が、改称2年目の日本語日本文学科に助教授として着任された。運動場（現在は5号館、いこいの広場）には学生たちから「サティアン」と呼ばれていた仮設校舎が立ち並び、校舎の解体・建設が進む岡本校地学内のあまりに悲惨な状況に、すぐに「辞めたい」とおっしゃったらどうしようなどと心配したのは事実である。

1997年、甲南大学も無事に復興を成し遂げてからは、中島先生の各方面での御活躍が始まった。

2001年には教授に昇進され、その後大学院も担当されることとなった。同年、日本語日本文学科の教育課程が大幅に再編され、「日本語教授法実習」に海外実習が新設された。実習の場は、臺灣の東海大學で行なわれることになり、2002年に第1回が行なわれた。そ

の後、2003年のSARS、2020年のCOVID-19による中止を除いて、17回にわたる臺灣実習を学生たちとともに実現してこられた。中国語には学生時代の御専攻から、また日本語教師としての中国滞在経験から不自由のない中島先生ならではの臺灣実習計画とその実現があり得たのであろう。その実習を経験した卒業生たち、さらに大学院に進学した学生たちが、現在、国内のみならず海外で多く日本語教師として活躍していることは、毎年度刊行された実習報告書とともに、中島先生が日本語日本文学科に残された大きな財産である。

中島先生が積み上げてこられた、もう一つの大きな財産は、学生たちが主体的に運営する日本語教育ボランティア活動「あおぞら」の立案・実行である。「あおぞら」は2004年から始まり、中島先生が国外研修で不在であった2008年度と、COVID-19の影響による2020年度をのぞき、15年間続けられてきた。ゼミの所属とは関係なく、外国人への日本語教育に興味を持つ学生たちが集まり、毎週の準備と活動を、静かに見守りながら導き、年度ごとに『あおぞら報告レポート』を刊行された。この報告は、参加学生たちにとっての「形ある思い出」に留まらず、貴重な実践報告書であり、甲南大学とっても貴重な財産である。

中島先生のお人柄については、言うまでもない。「北海道人」を体全体、行動そのもので表わしていらっしやう。いらちで細かいことばかりが気になる私の考えに対しておっしゃる「いいんじゃないですか？」「大丈夫じゃないですか？」の一言は、「雄大な北海道そのもの」を感じさせた。また、秋口になると、教授会には必ず膝掛け持参で出席された。「雄大さ」だけではなく、日常生活への細やかな配慮も、北海道という厳しい自然の中で過ごされた日々根付くお人柄であったと思う。ただ、御自身では気づいていらっしやうらないこととは思いますが、ときおり、軽く唇を囁むような表情をなさることがあった。決して声を荒げたり、荒っぽいことばをお使いになることのなかった。

中島先生がこの表情を見せたときは、一歩下がって、考え直したことが多かった。もう一つ、『北の国から』

に出てくる富良野の方言「ヘナマズルイ」について、
うかがった際、「ああ、知ってますよ」というそっけ
ない返事だけで、他人のことを決して悪く言わない、
中島先生らしい反応だった。

2021年4月、COVID-19が学生たちの生活にどのよ
うな影響を与えているのか、この原稿を書いている
2020年の年末、できる限り想像したくない。それと同
じく、いやそれ以上に、中島先生のいらっしゃらな
くなくなった10号館9階L-902研究室、少し背をかがめ一
歩一歩大地を踏み固めるように歩くあの後ろ姿を見る

こともなくなる空虚さは想像したくない。

残念ながら予定よりも早く、甲南大学を御退職なさ
り、郷里北海道に戻って新しい生活をお始めになると
いう。

最後になりましたが、甲南大学で御一緒できた25年
間、いろいろ無理難題をお願いし、そのたびに「あ、
いいですよ」と引き受けてくださったことへのお詫び
と感謝をもって中島孝幸先生を送ることばとしたい。

シタッケ！ 中島先生。